



Title	<書評> 加藤信哉, 小山憲司編訳 ラーニング・コモンズ : 大学図書館の新しいかたち 勤草書房 2012.7 290p 22cm 定価3,900円(税別) ISBN 978-4-326-0037-1
Author(s)	久保山, 健
Citation	図書館界. 2013, 64(6), p. 438-439
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25952
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

久保山 健

加藤信哉、小山憲司 編訳

ラーニング・コモンズ

大学図書館の新しいかたち

勁草書房 2012.7
 290p 22cm 定価3,900円(税別)
 ISBN 978-4-326-00037-1

1. はじめに

日本国内の大学にラーニング・コモンズという施設・サービスが見られるようになって数年になる。同時に、大学図書館における学習支援・教育支援という機能も着目されている。

関係者が頭を悩ましているのは、ラーニング・コモンズを計画中であれば、どのようなものを導入するか、導入済みであれば、どのように充実させていくかということではないだろうか。それぞれの機関の状況に応じて、学習支援・教育支援という文脈でどのような施設・設備を整備し、どのようなサービスを提供していくかが大きな課題の一つになっている。

そんな中、『ラーニング・コモンズ：大学図書館の新しいかたち』という、そのものズバリの書名を冠した本書が発行された。評者の率直な第一印象は、そのような書名の本が発行されたことに対する驚きと感嘆であった。

本稿では、内容を簡単に紹介し、本書が与える議論のヒントを考えてみたい。

2. 内容紹介

まずは、本書の内容を簡単に紹介する。

本書は、アメリカにおけるラーニング・コモンズがどのような考え方をもとに発展してきたのか、どのような変化をたどってきたのか、「主として2003年から2008年に発表された10の文献に着目、翻訳し、収録」(p.7) している。それらを挾む形で、序章を編訳者の加藤信哉氏・小山憲司氏が、終章を小山氏が執筆している。

“もう何年も前の文献を？”と思う読者もいらっしゃるかもしれない。しかし、編訳者は、人的支援より物理的な環境の整備が先行している国内の現状を捉え、「より充実した学習・支援サービスを提供

するため」(p.7)，上記のように基本論文を翻訳し、紹介することにしたという。

そして、国内に紹介する理由を、それらの論文に共通する主張が次の3点にあるからだとしている。

- (1)「学習用施設・設備を提供することだけがラーニング・コモンズの本質ではない」
- (2)「単に新しいニーズへの対応ではなく、図書館が本来果たしてきた機能や役割を再検討し、再構築しなくてはならないという危機意識」を発端にしている
- (3)「ラーニング・コモンズというコンセプトをつうじて大学図書館が目指すべき将来像が語られている」

紹介されている10の論文は、時系列順の配列ではなく、概念の整理をする文献から、より具体的な検討を扱う文献に並べられている。

本書では、p.12から収録論文の概要を紹介している。収録論文は8つのテーマに分けられるとのことなので、それを紹介しておく。以下のカッコ内は、本書での章番号である。

- (1) ラーニング・コモンズとは—その概要を知る(1～3章)
- (2) インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズの違い(4章)
- (3) インフォメーション・コモンズの発達の経緯(5章)
- (4) 図書館ユーザとしてのネット世代(6章)
- (5) ラーニング・コモンズ設計のポイント(7章)
- (6) インフォメーション・コモンズと学習との関連(8章)
- (7) 大規模研究大学における事例研究(9章)
- (8) 米国大学図書館でのラーニング・コモンズ導入の現状と影響(10章)

終章では、「国内の大学図書館におけるラーニング・コモンズの現状：アンケート調査を中心に」と題して、2010年11月から翌年1月にかけて実施した調査結果報告を収録している。悉皆調査ではないが「個々の具体的な事例をつうじて、2010年度時点でのラーニング・コモンズの実態やその特徴を明らかにすること」が目的である。設置年度や名称に始まり、設備や人的支援について調査結果が報告されている。そして、国内の状況を整理し、人的なサービス展開を今後注目したいと述べられている。

以上のように、本書はアメリカの10論文を翻訳す

ることによって、ラーニング・コモンズを巡る議論の基本的な流れを確認し、国内の今後の検討材料とすることを目的としている。

3. 興味深い章

個人的な印象となるが、第7章以降の具体的な検討がされている論文、中でも第7章「高等教育における学習スペースの設計に当たって最初に問うべき質問」（スコット・ベネット）に興味を引かれた。

第7章で、質問1～6のような形で提示されている論点は、具体的な空間設計の際に考慮したい事柄である。例えば、質問2では「学生が勉強に使う時間を増やし、勉強の生産性の向上を促進させるためには、このスペースをどのようにデザインするのか」という論点が提示されている。そして、別の知見を活用しつつ、「利便性」「快適性」「静寂」という3つの特徴から論を展開している。

もしかすると、これらの議論は実際的な空間設計や、テーブルの形状・大きさといったことに比べると具体性は低いかもしれない。しかし、それらの論点を掘り下げる、ないし念頭に置くことは有用だと感じた。

4. 本書から得られるヒント

本書のメリットは、ラーニング・コモンズを巡る議論の基本的な流れや論点が確認できることであろう。そして、国内での今後の検討材料にもなる。

しかし一方、本書に目を通すことで、国内の大学図書館の姿に素早い変化・改善を求められていることを改めて強く感じる。そして、それは大学教育の変化に応える形での変化・改善であるべきである。皮肉な言い方になるが、本書で紹介された論文が書かれてからもう数年になるという現状を皆さんはどういう理解されるだろうか。着実に変わりつつあるという見方もあるだろうし、評者もそれは否定しない。しかし、サービス提供についての土台の考え方の構築、状況に対応したサービスの改善が素早くできているかと省みると、何かが足らないという思いが湧くのも事実である。

評者の勤務部署でも、前の担当者からの学習支援企画の流れを発展させるべく、「商品化・事業化」という考え方で、種類や回数の充実を図っている。全学の教育改革と進展が進む中、2012年11月にはラーニング・コモンズの機能を強化、進化させていくものとして「グローバル・コモンズ」という新しい共同学習スペースの開設も行った。それらが有用

書評（久保山）、図書館学教育研究グループ案内

なものとなるよう同僚や関係の方々を含め尽力し、実際相当な労力を投入している。しかし、自らを問い合わせ直す姿勢は常に持っていたい。

自戒を込めた問い合わせてみよう。大学ないしへの機関の置かれている状況の理解はどうだろうか。人的ないしソフト面でのサービス提供、ハード面での施設や設備の提供の具体的なノウハウは蓄積できているだろうか。少なくとも近い将来までの展開方策、維持体制のイメージは描けているだろうか。そして、ラーニング・コモンズや学習支援に関わる我々は、それぞれの状況に応じて、素早く自らを変化させていくことを求められている。ラーニング・コモンズに限った話ではないが、状況というの常に変わっていくものである。つまり、完成形というのは、あったとしても常に一時的なものである。自らを問い合わせ直すことでも常に必要である。

その問い合わせ直しの際に、本書の内容はそのヒントを与えてくれるものになるだろう。

（くほやま たけし 大阪大学附属図書館）